〈木岡哲学対話の会」2025.3.2

「環境問題」とは何か

出張講演（於東洋大学）の資料「風土学へのいざない」から、三つの基本事項を確認し、「風土学へのいざない」（続）に記したような風土学的実践の意義を考える。

Ⅰ　確認事項

○「環境」「生態系」「風土」の関係

○ミクロ・メゾ・マクロ――空間の三つのスケール

○「最も広い意味での環境問題」とは？

Ⅱ　風土学的実践（環境の倫理）

○〈中間〉（メゾスケール）から考える

○〈あいだ〉を開く――自分の〈場〉をつくる

○〈対話〉の意義――「三人体制」の構築

〈三つの課題〉

(1)〈個〉の自覚――メゾからミクロへ

(2)〈地域〉におけるネットワーキング――メゾの拡充

(3)〈地球〉への視点――ミクロ・メゾからマクロへ

［概要］

〇二部構成の狙い

Ⅰ　講演資料「風土学へのいざない」から、1)「環境」の概念、２）空間の三つのスケール、について説明する。つづいて、３）「最も広い意味での環境問題」に、通常意味される「地球環境問題」を含む現代社会のほぼすべての問題が当てはまるゆえんを明らかにする。

Ⅱ　講演では以上をもとに、環境問題に対する取り組み、「環境の倫理」を語った――事後配信した「風土学へのいざない」（続）のとおり。身近でローカルな関係性である「三人体制」をつくる＝メゾ・レベルの実践、それをミクロの〈個〉に集約する、マクロの〈地球〉にズームアップする、という二方面作戦（三つの課題）を提案する。

〇理論から実践へ

Ⅰ――PPT を映写し、「環境」「生態系」および「風土」の概念を区別し、関連づける。風土の意味する「通態化」により、「環境問題」のあらゆる局面が、風土学の視界に入る。風土学が扱うのは、「関係性」（ベルクの定義）、私の言葉では〈あいだ〉である。人と人の〈あいだ〉、人と自然の〈あいだ〉が、環境問題の実体となる。今回、講演の準備中に、空間のスケールの区別が、「関係性」の異なるあり方を表すことに気がついた。他者との関係性（あいだ）は、中間的な「地域」のスケールにおいて、明確に具体化される。ここを拠点として、ミクロおよびマクロのスケールに展開できると分かったことで、風土学の取り組みをあらゆるレベルの問題に広げる見とおしが立った。非常に重要な〈発見〉である。

Ⅱ――「環境の倫理」のカギは、〈あいだ〉を開くこと。すなわち、風土学のテーマそのもの。同じテーマでありながら、環境学の対象が狭い意味の「環境問題」に限られるのに対して、風土学は通常の環境問題を含みつつ、そこから区別されるような〈あいだ〉にかかわるあらゆるテーマを、「最も広い意味での環境問題」として取り上げる――ウソだと思われる向きは、自身にとって切実な意味をもつテーマを何か挙げられたい。それを「環境問題」と呼ぶかどうかはさておき、風土学によって取り上げることのできない問題はないことをお示しする。このさい強調したいのは、現代世界における深刻な問題が、すべてたがいにつながり合う〈系〉を構成していること、「環境」を問題にするとき、「最も広い意味…」をふまえ、その〈構造〉全体を意識してかからねばならない、ということである。

「三人体制」は、メゾスケールの出発点。受講する学生に向けた具体的な提言として、これが真っ先に思い浮かんだ。「感想レポート」からも、インパクトがあったことが窺われる。メゾから出発する場合の方向は、三つ。メゾから、**①ミクロ（個）への集約**、同時に、**②メゾ（地域）におけるネットワークの拡充**。ふつうに言われる〈個の自覚〉は、アトム的な個の立場ではなく、他者とかかわるメゾの〈あいだ〉から成立する。講演では、②までを示すにとどまったものの、これら以外に、**③ミクロ・メゾからマクロ（地球）への拡大**、という方向が課題になる。それが可能であるのかどうか。可能だとしても、どうすればよいのか。③についての成案は、いまだ持ち合わせていない、というのが現状である。